

---

# スカーレット

雨音咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スカーレット

### 【著者名】

雨音咲

### 【あらすじ】

中学3年生。松下結衣は恋をした。しかも、学年1年の美少年、南隆宏に！！2人が繰り広げる、温かくて、切なくて、思わず泣けちゃう恋愛小説。

## 第1話・恋愛音痴 from : yui

「結衣、俺…お前のことが好きだ。俺の彼女になつてほしい」

私、松下結衣は桜中学の3年生。一応バスケ部のマネージャー。  
そして、私の片思いの相手、南隆宏はバスケ部のエース。

この前、そんな南君に告られる夢を見た。

「好きだ。彼女になつてほしい」なんて本当に言われたら…。  
そんなことあるはずが無いと思つたら、「はあー…」とため息が漏  
れた。

「結衣、部活行こりよ

そう言って声をかけてきたのは冴木えみ（さきえみ）。一緒にバ  
スケ部のマネージャーをやつている私の親友。  
「うう…うん

「結衣！またあの夢のこと考えてたでしょ！」

体育館に向かう途中の廊下でえみが言った。

「なつ！なんで分かるの！？」

「顔がにやけてたんだよお。本当に南君のこと好きなんだね」「私は恥ずかしくて下を向いた。

「そんな恥ずかしがらなくてもいいよ。人を好きになるって大事なことだよ。…でもなんで告らないの？」

「私だってそんなバカじやないよ。南君に告つたつてフラれるつて分かつてる…」

南君は3年の中でも1位2位を争う人気者。背が高くて、かつこなくて、おまけに性格も良い。

「でもさ、フラれてもOKでも気持ちを伝えることに変わりはないじゃん。それに私達3年だよ！中学校生活だってあと1年だよ！このまま告らないで高校行つてもいいの？」

「それは、そうだけど…」

どうしよう。私だって告れるのなら告りたい。  
でも多分出来ないだろ？…。

もちろん、相手が南君だからとこいつもあるけど、もうひとつ理由がある。

私は…男の子が…というか恋愛に対し「音痴」なのだ。  
音痴というよりも…今までこんなに人を好きになつたことが無いから、どうすればいいかがまったく分からない。

これからどうすればいいものか…。

## 第2話・期待と不安 from:yui

体育館では、女子バレー部（通称：女バレ）と南君のいる男子バスケットボール部（通称：男バス）が練習している。

私とえみが体育館に着くと、ちょうどつとも休憩をしていた。

私は南君を見た。何人かのメンバーと一緒に楽しそうに喋っていた。カツ「いいなあ…」。そう思つて見ていると私の耳に女バレの話し声が聞こえてきた。

「南君カツコいいよねえ~」

「なんで彼女いないんだろうねえ~」

すると1人の女の子が急に声を小さくして言つた。

「私…この前、南君に告つたんです…」

女バレのメンバー全員の目線が1人の女の子に移つた。

その女の子は2年生だった。可愛くて、女バレの3年の間でも性格がいいと噂の女の子だった。

（南君後輩にも人気あるんだなあ…）

「それで、『好きな人がいるから、付き合ひ』とは出来ません』って言われちゃいました…」

みんなが一旦「可愛そつに」顔をしてから「ちょっと待てよー」という顔つきになつた。

「南君て好きな人いるのー? それっていつたい誰ー!」

その声は体育館全体に木霊した。

もちろん南君にも聞こえてしつた。

女バレの人は「しまった!」という顔つきをしていた。

さつきまでにぎやかに話していた南君は、その言葉を聞くと、顔を赤くして下を向いていた。

すると周りにいた4・5人の男子が、笑いながら南君のことを探していました。

南君は本当に恥ずかしそうにしていた。

南君の好きな人っていうの誰なんだろう…。

「結衣ちゃんー!」

振り向くと、そこには西野君こと西野隼人(はなわじゅんじん)がいた。

彼はバスケ部の2年生で、南君のことをとても慕っている。そのかわいらしい顔はまるで女の子みたいで、3年生の間では「カワイイ」と評判の男の子だ。

「この時間に来るってことは、また補習でもしてきたの?」「いやあ、この前のテスト全部赤点で…。早く部活行かしてくれ! つて先生に頼んだんですけどねえ」

「西野おー！練習始めるぞー！」

そういう言ひ方をされているのは、さつきまで恥ずかしがつていた南君だ。

「はーい！」

南君はちゃんとOZONEFを持つている。遊ぶ時は遊ぶ。  
練習する時は練習。

(…そういう所もカッコいいんだよねえ…)

「じゃあ練習行つてきます！僕のスーパープレー見ててくださいね！」

…後にこの西野君が、私の恋に大きく関わるなんて、この時は思つてもいなかつた。

「お疲れ様でしたあーーー！」

今日も無事部活が終わった。私は真っ先に結衣の所へ言つた。

「結衣！休憩時間の時の話を聞いてた！？」

「聞いてたに決まつてんじやん！－もおむつをからぬになつりやつて…」

「もしかしたら結衣のこと好きだつたりして…－」

「ばつ…ばかっ！そんなはず無いよ…」

「だつて南君、結衣のことよく見てる気がするよ」「きつ、気のせいだよそんなの…それに、そんなこといつと変な期待しちゃうじやん！」

結衣は、顔を真っ赤にした。そして「片付けしてくれる」と黙つて走つていってしまった。

つたぐ、この子は鈍感だなあ…。

自分ではモテないって思つてるみたいだけど、結衣は結構男子から人気らしい。

多分男子は、ああやつて恥ずかしがつたりしている初々しい結衣の姿を見て「可愛いー」と思うのだろう。

私も一緒にいて可愛いなあと想つし。きっと南君だって、そう思つてるんじゃないかなあ。

ちなみに私はこういう情報を色々知つてゐる。

「えみいー」

そういうてやつてきたのは、私の彼氏、翔太こと山本翔太。バスケットボールのマークメーカーで、南君とすごく仲が良い。

一見軽い男に見えるけど（私も前まではそう思っていた）本当はすごく優しくて、良い奴。

ちなみに、私の情報の約80%は、この男から聞いたものである。

「ねえ、翔太。南君って誰のこと好きなのかなあ？」

「えっ！えみ俺より南の方が好きなの……」

「そんな訳無いでしょ！結衣の為に聞いてるの！」

「なあ～んだ。良かつた。でも『私の好きなのは翔太だけ！』とか言つてほしかつたなあ……」

すねた様子で翔太は言った。

「そんな恥ずかしいこと、みんなの前で言える訳無いじゃん！（好きだけどね……）

ていうか話がずれてるよー南君の好きな人は誰か聞いてたんじやん！」

「『めんめん。南の好きな人ね……。これ知ってるのは多分俺だけじゃないかなあ』

「だつ、誰！？」

「それは……」といつてしまら迷つてから、翔太は重い口を開いた。



## 第4話・翔太の罪滅ぼし from...emi

「それは……」

「私を信じて！本当に誰にも言わないから

すると翔太は「じゃあ、えみのこと信じて話すから」と言いつて、  
ボール倉庫へ私を連れ出した。

そして今まで見たことの無いような真面目な顔で、静かに語りだした。

「あいつが好きなのは…………結衣ちゃんだよ

私は内心嬉しくて「本当！」と叫びそうになつたが、翔太の真面目な顔を見て、まだ叫んではいけないと想い、グッと我慢した。  
そして翔太は話を続けた。

「なんで俺がこんなに真面目に話してるとか、ちゃんと理由があつて…長くなるけど話しても良い？」  
「もちろん。その話詳しく聞きたい」

「1年の頃の話なんだけど… 南、ある先輩に告られてた。それで南は断つたんだ。その先輩のこと好きでもないし、1年生だから付き合つとかそういうことは出来ない… って。

でもその断つた相手が悪くて…。学年1モテる先輩だつたんだ。フラれることなんて、今まで1度も無くて。しかも1年にフラれたつて言つのが気にくわなかつたらしくて。

その日から、南に対する嫌がらせが始まつたんだ…。下駄箱には毎日のように脅しの手紙と、ガラス片。廊下ですれ違うと足踏まれて。いたずら電話とかもしそうだつたらしい。日に日にその嫌がらせはエスカレートしてつた。

その先輩、バスケ部にもそのことを言つたんだ。勿論モテる先輩だつたから、バスケ部にも彼女のことを好きな先輩が何人もいて。それに南は1年すでにレギュラーだつたから、それに腹を立てて先輩も加わつて、バスケ部でも嫌がらせが始まつたんだ

私はあまりの辛さに耐えられなくなつて、翔太に早口で聞いた。

「そつ、そのことは先生には言わなかつたの？」

「言おうとしたよ。バスケ部全員がそのことを。

でも南は『俺1人の問題だから、そのことでみんなに迷惑かけることは出来ない』って言つて、バスケ部を辞めたんだ。

俺はそんな南の姿を近くで見ていたのに、何一つ出来なかつた。

先輩が怖くて何も言えなかつたし、先生にも言えなかつたし…一緒に部活を辞めることも出来なかつた。

あの時の自分をブン殴つてやりたこよ。

『なんでお前は、親友の為に何もしてやれないんだ!』って。  
思い出すと、本当に自分が情けないよ…』

私はあまりのショックで、何も言えなかつた。

南君にそんな過去があつたなんて…。中学1年生の彼には、重すぎ  
る過去だ…。

「南が部活を辞めて、嫌がらせは段々無くなつて。そのうち3年が  
卒業して、南もやつと部活に戻つて来れた。  
でも、あいつは変わつていた。

あの日から、女の子を極端に避けるようになつた。

でも、最近やつとあの時の傷が癒えてきたんだ。  
女子に対する恐怖も段々と無くなつたみたいで。

それで、少し前に南から、『結衣ちゃんのことが好き』って聞いて、  
嬉しくて嬉しくて…。

俺はある時何も出来なかつたから。

今回は、少しでもあいつの力になつてやりたい。

せつかく、人を好きになれたんだから、両想いにしてやりたい。  
これは俺の、南に対するせめてもの罪滅ぼしなんだ…』

私は、こう答えた。

「結衣は、ずっと前から南君のことが好きなんだよ。いつも南君のことばっかり話してる」

それを聞いた翔太は、目を見開いて「本当…？」と興奮気味に叫んだ。

私がこくりと頷くと、さっきまでの顔つきが嘘のように、パーッと明るい顔になつた。

「私達で協力して、2人をカップルにしようよ！」

「うん！じゃあ2人で協力して、南と結衣ちゃんをカップルにする為に頑張ろう！！」

こうして私達2人は「カップル南君と結衣をカップルにしよう同盟」略して、「M（南）Y（結衣）K同盟」を結んだ。



## 第4話・翔太の罪滅ぼし from...eme (後書き)

雨音の独り言…

皆さん初めまして。雨音咲です。  
いつもスカーレットを読んで頂きありがとうございます。  
今回ばかりは皆さんにこくつかお願いがります。

一つ目…この小説を読んで、感想がありましたら、雨音の方までどんどん送ってください。（実はまだ1通も来ていないなくて寂しいのです…）

なお、この小説の批判・悪口等は、雨音が大変傷つくなので止してください。

また、評価等もして頂けると嬉しいです。

2つ目…もしこの作品を気に入つて頂けたら、お友達などにどんどん紹介しちゃってください。たくさんの方に読んでもらえたら、光栄です。

以上、雨音でした。これからもスカーレットをよろしくお願いします。

## 第5話・1通のメール from:yuu

今日は日曜日。

思えば、3年生になつてから早1ヶ月。桜も散つて、若葉の季節になつた。

…マイナスに考えると、南君と一緒にいられる時間が、残り約1ヶ月…。

1日1日、何も無く過ぎていく…。  
私はこんなで良いのかな…。  
最近ちょっと不安になつてきた。

考えてみると、私は南君とまともに喋つたことが……無い。  
せいぜい、挨拶したとかそれくらいだ。

このままでも良いの…?

このままじゃ、本当に何も無く終わっちゃうよ〜〜〜!

ピロリロリン

そんなことを考へてると、1通のメールが来た。

もお、なんて場違いなメールなんだろう。

渋々、ケータイを見ると、見たことの無いアドレスだった。

迷惑メールかな？と思つて本文を見てみる。

「件名：初めまして」

本文

初めまして、南です。バスケット部の、南隆宏。  
これから、どうぞよろしく。

！-----！

み、南君！？

なんで私のアドレスを知つてんだろ？

とりあえず、返事を打たなきや！

えつと…どうしよう。

緊張して、何打つていいか分からぬよお～。

とりあえず自己紹介を送んなきや。

「Re：初めてまして」

本文

松下結衣です。メールありがとうございます。お忙しいところ失礼します。

…初めてなのに、馴れ馴れしいかなあ？  
でも堅苦しいのも嫌だし…。

ええい！もつこれで良いや！送信！

緊張と不安で、ソワソワしていると、返事が帰ってきて来た。

本文：  
俺、女の子とメールするの初めてだから、どんなこと打つていいか  
分からなによ…。

なんか、すぐ緊張するね。

以外だった。

南君が、女の子と初めてメールするなんて。

もしかしたら、私と南君は、少し似ているのかもしれない。  
そんなことを思った。

それから、何回かメールは続いた。

最後のメールには「今度はメールじゃなくて、ひやんと喋れると良  
いね」と書いてあった。

メールをしてみて、「南君と喋りたい」と強く思った。  
どんな人なのか、もつともつと知りたい。声を聞きたい。そして…  
…両想いになりたい。

南君に対する想いは、日に日に強くなつていった。



## 第6話・初恋 from:takahiro

今さっきまで、俺はある人とメールをしていた。  
その人とは……松下結衣のことだ。

本当はずっと続けていたかったが、心臓が無理だった。  
これ以上続けていたら、あまりの緊張で、心臓が破裂してしまう。  
もともと、メールが苦手な俺が、女の子に、……ましてや好きな女  
の子にメールを送るのに、どれだけの勇気が必要か…。

初めて、松下結衣のことを知ったのは2年の頃だった。

彼女はバスケ部のマネージャーになった。

俺は一目で恋に落ちた。

…初恋だった。

それから俺は、気が付くと彼女のことを見ていた。  
色白な肌。吸い込まれそうな瞳。はにかむ笑顔。  
彼女のすべてに、俺は虜になつた。

でも、緊張してまともに話したことは無い…。

本当はものすごく話したいのだが、どんなことを話せば良いか分から無くて、話せずにいる。

それに彼女も、男子とはほとんど話さないので、彼女から話しかけられたことも無い。

そんな俺の気持ちを知っているのは、親友の山本だけだ。

その山本が、昨日松下のアドレスを教えてくれた。  
あまりにも急に教えられたのでビックリしたが、山本の気遣いが嬉しかった。

「中学生活もあと一年だ！ ということは、好きな子にアタックするチャンスも1年しか無いんだぞ！ ！」  
といって、俺を応援してくれた。

俺はいつか…いや、近々。

松下に自分の気持ちを伝えたいと思つてこる。

多分すぐ緊張すると思う。

でも、もしも伝えられなかつたら、その緊張の何百倍も後悔する。  
後悔するのは嫌だ。

でも、ひとつだけ迷いがあつた。

西野が松下のこと好きなのだ。

俺は、後輩と初恋のどちらを選べば良いのだろう……。



## 第6話・初恋 from:takahiro(後書き)

雨音の独り言…

こんばんわ。初めて隆宏の目線で書いてみましたが、どうでしたか？  
次話以降も、いろんな目線で書いてみようと思つています。

果たして南と結衣の恋はどうなるのでしょうか…！

(…実際、作者の私も分からぬのですが(笑))

今後も2人の恋の応援、よろしくお願ひします。

また、感想等もお待ちしております。ビジュアル送つてください！お願いしますー！

以上、雨音咲でした。

## 第7話・朝の出来事 from:yui

楽しい週末はあつという間に過ぎ、月曜日になつた。  
いつものようにバスに乗りつて学校に行く。  
バス停から歩いていると、急に声をかけられた。

「おひ、おはよー」

振り向くと、そこには南君がいた。

「おはよー」

あまりに突然にビックリした私は、声が少し裏返ってしまった。

そして、南君の一言がきっかけで、2人で並んで登校することになった。

こつして並んでみると、南君は大きいなあ…。（私は160cm。

南君は178cm）

「この前は、メールありがとう」

少し照れながら南君は言った。

「こちらこそありがとうございます。」

…私は、『南君が女の子と初めてメールする』って送つて来た時、  
ビックリしたよ。

なんか以外だった

「そう？でも俺、本当女の子とメールとか話しかしくて。

…話しかしたいんだけど、何話せば良いか分かんなくて…」

「でも、今日は話しかけて来てくれたじやん

「俺、松下と話してみたかったからさ…」

その言葉を聞いて、私は自分でも分かるくらい、カーアツと顔が赤くなつた。

「でも、なんか不思議だよ。初めて話すのに、すぐ自然に話せる。俺にしては珍しいよ」

そう言って、南君も少し顔を赤らめた。

「本当だね。私も男の子と話す時はなんか不自然になるタイプなんだけど、今はすぐ自然に話せる」

確かに、自分でもすぐ不思議だつた。

まともに男の子と喋れない私が、大好きな南君とこうして普通に話せているなんて。

「なんか今急に思つたんだけどさ……もしかしたら、俺達つて少し似てるかもね」

その言葉に、私はすぐビックリした。私もそう思つていたからだ。「私も思つた！それに、これは今初めて分かつたんだけど、南君と一緒にいるとすぐ安心するの」

「今までには気が付かなかつたけど、俺達つて相性良いかもね」

そう言って、私達は微笑んだ。

この日がきっかけで、私達の距離はすこしずつ縮まっていった。



## 第8話・校中… from:takahiro

田羅口、山本に電話をした。

「俺はどうすれば良いのか」と。

もし、松下と上手くいったとしても、西野がいる。

松下との距離を縮めたくても、西野の事が気になってしまふ。

山本はすこし悩んで言った。

「西野が気になつて恋が出来ないのならば、西野にお前の気持ちを伝えれば良いんじゃないのかな?それで結衣ちゃんと仲良くなれば、後悔もしないはずだよ」

そして付け加えた。

「でもまずは、結衣ちゃんと話してみなきゃ始まらないよ…明日の朝にでも、話しかけやいなよ…」

俺は、「そんな事、いきなり出来無いよ!」

と言つたものの、山本の言つ事は最もだと理解つた。

まだ、話してもいないのに、こんなに先の事ばかり考えてはいけない。

先を見る前に、足下を見なけば。

「大丈夫。俺も途中まで一緒に着いて行くから」

「……本当に平氣かなあ?」

「そんなふつむじもじしてると、結衣ひやんに嫌われちゃうぞー。」

！」

「…じゃあ、思い切って話しかけてみるよー。」

そして月曜日の朝、俺は山本に背中を押されて、松下に話しかける事が出来た。

自分でビックリした。

初めて話したこと、自然に話せる。

松下も俺と同じようにすぐ楽ししそうだった。

この日から、松下と少しずつ話すようになった。

ほんの一言の会話でも、俺にとっては、彼女と話せるとこう事だけでとても嬉しかった。

一緒に笑えるという事が、楽しかった。

そして、もつともつと、好きになつた。

そんなある日の事だつた。

下校していると、急に雨が降つて來た。

俺は傘を持っていなかつたので、すぐ近くの公園で雨宿りをする事にした。

俺は猛ダッシュで公園のベンチへと向かつた。

そして、ピタリと足を止めた。

そこには、松下がいた。

なんだか、いつもとは違う大人っぽく色氣のある彼女に、俺の心臓はドクリと鳴つた。

そして、話しかけようとした瞬間。  
逆方向から誰かが走つてくる。

小柄でかわいらしい顔。

トレードマークの赤い靴。

手を振りながら、松下のもとへ走つて行く。

……その男は、まぎれも無く西野だった。



## 第9話・恋と涙 from:takahiro

俺は、こんな事してはいけないと思い、その場から立ち去る。うつとした。

別に、松下は俺の彼女でもなんでも無い……。

誰のものでもないんだ……。

だから西野が何をしようが、俺には……関係ないんだ……。

でも、なんでこんなに胸が苦しいんだろう。

俺の理性は本能を押さえきれなかつた。

松下の事を好きだといつ気持ちは、押さえきれなかつた。

そして、気が付くと、2人を見ていた。

「すいません……僕から呼び出したのに遅刻するなんて……本当にごめんなさい……」

「大丈夫だよ。そんなに待つてないから。  
それより、話しつてなあに？」

西野はまっすぐ松下の顔を見て、ゆっくりと言った。

「俺は、かつて良くもないし、悪くもないし、結衣さんよりも年下です。

……でも、こんな俺だけど、結衣さんの事を想う気持ちは誰にも負けない自信があるんです」

「結衣さんの」……すうとうと好きでした

松下は目をまん丸くして、西野の事を見ていた。  
信じられないといつような目だった。

「西野君…………私は…………」

その時だった。

西野の顔が、松下の顔へと近づく。

そして、2人はキスをした。

バタッ

俺は持っていた鞄も思わず落とした。

その音で、2人は一斉に俺の方を見た。

「みつ、南君！――！」

「先輩！――」

俺は、なりふり構わずそこから逃げた。  
もう、この場所に居る事が辛かつたんだ。

「南君、待って！！」

そう言つて。追いかけてくる松下を俺は無視した。  
彼女からも逃げた。

走つて、走つて、走つて……。

俺は、膝から地面に崩れ落ちた。

雨に濡れたコンクリートはまだ冷たくて、俺の心はきつきつと痛んだ。

どうしてなんだよ……。

俺は、どうすれば良いんだよ……。

なんだこんなに、辛いんだよ……。

俺の目から、一筋の涙がこぼれた。

松下は、何も悪い事なんてしていない。

ただ、西野とキスをしてしまった……それだけだ。

悪いのは、2人の事を勝手に見ていた俺の方なのに……。

雨に打たれながら、俺はただ泣いていた……。



## 第9話・雨と涙 from・takahiro (後書き)

雨音の独り言…

こんにちわ、雨音咲です。

第9話は、書いていてとっても切なくなっていました…みなさんはどう感じましたか?

今日は、この「スカーレット」の名前の由来を話したいと思っています。由来は実に簡単です。

皆さんには「スピッツ」というバンドを知っていますか? (とっても有名ですよね)

私はその、スピッツのスカーレットという歌が大好きなので、思い切って小説の名前にしました。  
歌詞が、切ないんです… (涙)

この歌、本当に良い歌なので、機会があれば是非聞いてみてください。

あと、小説の感想も待っています。

以上、緩い感じで現場の雨音をお伝えしました。

## 第10話・後悔 from:yuu

罪悪感…。

私の頭の中は、その事で一杯だった。

昨日、私は西野君に告られ、キスまでしてしまった…。  
そして、その場面を南君に見られてしまつた…。

はあ…。

私は一体何をしていいんだら?…。

びひしてあの時、わちんと断る事が出来なかつたのだら?。  
「私は、他に好きな人が居ます」…と。

その一言がわちんと言えれば、南君も西野君傷つける事は無かつた。

あの時の南君の顔は、一言でも言い表せない位悲しく、辛そうな顔  
だつた。

その顔を見た時、私はやつてはいけない事をやつてしまつた……と  
深く後悔した。

そしてさつと、西野君も悲しかったと思ひ。

あんな中途半端な答え方をしたら、かえつて嫌だらう。

私は、ただ悩んでいた。

悩むだけで、何も出来ていない自分に余計腹が立つた。

「結衣～？起きていますかあ～？」

私がハツとすると、田の前にはえみが立つていた。

「何か悩み事？」

「……うん。かなり深刻な悩み事…」

「そつか…。私で良かつたら相談乗るよ」

「…………って訳で、私は「ぐく自分で嫌で…」。昨日の事をす「ぐく後悔してて…」

えみは、しばらく悩んでからこう言つた。

「結衣は、この後どうしたいの？」

「えつ…それはもちろん、南君の事が好きだから…………多分…」

「ほんの少しだけでも、西野君の事好きなんじゃない？」

やつ言つ優柔不断な気持ちだと、どうも逃げつけりと思ひ

「結衣が、本氣で南君の事を好きなら、南君とあわせと話しなよ」

えみの言葉を聞いて、私は自分の気持ちが分からなくなっている事に気づいた。

私は、本気で南君の事が好き…？

なんでこんなに悩んでるの？

2人とも失いたくないから？

クエスチョンマークばかりが私の頭に浮かんだ。

南君。

あなたはどうですか？



## 第10話・後悔 from:yui (後書き)

私雨音の独り言…

9月に入り、私雨音も何かと忙しい毎日です。  
なので、小説の更新が遅れてしまっています。  
すいません。

…でも遅れてしまつ分、今まで以上にまつすべな文を書きたいと思  
います。

そんな訳で、これからじっくりよろしくお願いします。

## 第1-1話・交差する心 from:yuu

何も出来ぬまま、時間だけがただ過ぎて行く。  
たつた今、部活が終わった。

えみの言葉が何度も何度も頭をよぎる。

「南君の事、本気で好き?」

その事をただ考えていた。

私は南君の事が好き。

……でも本気がどうかは分からなかつた。

だつてまだ恋人同士でもなんでもない、ただのクラスメイト。

……クラスメイトだけど、特別な存在。

ねえ、えみ。

本気で好きじゃないといけないのかな?

こんな未熟な気持ちで恋しちゃいけないのかな?

ふと南君を見ると、なんだか暗い表情で下を向いていた。  
そういえば、プレーもいつもとは違つてミスが目立つっていた…。

私はあらためて、南君を傷つけてしまつたと思つた。

そんな南君の姿を見るに見かねたのか、西野君が南君に声をかけた。

「先輩…ちょっと良いですか？」

私は、まるで昨日の南君のように2人会話に耳を澄ませた。  
(でももしも、相手の子が西野君じゃなくて女の子だつたら?  
目の前で告白されて、キスされて……)  
南君はこんな思いで、私達を見てたんだな…。

「昨日は……本当にすいませんでしたーー！」

西野君は、深く頭を下げていった。

「別に西野はなんにも悪くないよ。…ほら顔を上げて。  
隠れてみてた俺が悪いんだよ」

「そんな事無いです！」

好きな女の子が、他の男と2人きりで話しててる姿、誰だつて見ちゃうと思います」

「…………えつ……」

「僕気付いてたんですね。

先輩は結衣さんの事、好きなんですね

「…………」

私は、驚きとともに、嬉しそうに口をひらひらさせながら持ちこなした。

「知つてあんな事するなんて僕最低ですよね。でも、僕怖かつたんです……」

「怖かつた……？」

「結衣さんが先輩に取られかけついで怖くて。だから少しでも結衣さんに僕の事を好きになつて欲しくて……吻までしちゃつたんです……」

「西野……」

「…………でもダメでした。

どんなに僕が頑張つても、結衣さんの瞳には先輩しか映つてないんですね。

僕じゃ無理なんです。結衣さんを幸せにする事、出来ないんですね」

そう言つている彼の目は涙で一杯だった。

「だから先輩お願ひです。僕の替わりに、結衣さんの事を幸せにして下さーい」

## 第1-2話・ずっと伝えたかった事 from you

私はその場を立ち去りました。

……だってこれ以上聞いていたら、あまりにも悲しくて涙が出てしきったから。

足を一步踏み出したその時だった。

「なあ、松下。……お前は本当に俺で良いのか？」

驚いて振り向く私を見て、「そこに居るの、気が付いてたんだよ」と口の端だけで笑みを作る。悲しそうな微笑みだった。

「西野が居る前で、こんな事言つのはなんなんだけど……今の俺じゃ、松下の事を幸せに出来ないと思つんだ」  
一瞬その場が凍り付く。

慌てて西野君がその事を否定する。

「先輩、何言つてるんですか！結衣さんの事を幸せにできるのは…

先輩だけなんですよ!」  
訴えるような目で言った。

南君は、その訴えに静かに返事をした。

「今の俺は、お前みたいに、相手の気持ちをそんなに大切に思う事は出来ない。

俺よりも西野の方が、ずっとずっと松下の事を幸せに出来ると思つ

……

「先輩……」

2人とも黙つて下を向いてしまった。

何とも言えない空氣に、私は包み込まれる。

しばらく沈黙が続いた。

そして私は、自分の気持ちをきちんと2人に伝えよつと思い、そつと口を開いた。

「私にとつての幸せは…、みんなで泣いたり、笑つたり、怒つたり、

喜んだり……。

人といろんな事をわかつ合えるつて、すゞく嬉しい。  
その瞬間、私は1人じやないんだつて思つ。  
たくさんの人々に支えられてるんだなつて実感する。

そういう事つて、すゞく些細な事なんだけど、凄く新鮮で大切な事  
だと思つ。

当たり前のような毎日が、すゞく幸せで……」

不意に、涙が溢れてきた。

悲しい訳じやないのに……、なんだか嬉しくて……。

その涙を、必死にこらえて話を続けた。

「南君は私の事を幸せに出来ないつて言つてるけど、南君が思つて  
る幸せは……私が思つてる幸せとは違う気がするの……。  
南君は、物語のような完璧な幸せを思つてる……、そんな気がする。  
私は、完璧じやなくて良い。不器用で良い」

「ただ……あなたの傍に居るだけで良い」

「……こんな俺の、傍に居るだけで……？」

私は、その言葉にゆづくつと頷いてから、西野君に小さく「いあん  
ね」と呟いた。

そして、南君に最後の一言を。ずっと伝えたかったことを、あいつたけの勇気を振り絞り伝えた。

「南君の事が…………好きです」

心臓が破裂しそうな位ドキドキとなる。

そのドキドキが巴になじように、南君の顔を真っすぐと見た。

そして、ゆっくりと南君が答えた。

「…………ありがとう。そう言つてもいいんで、すいへ嬉しこよ。  
俺も…………松下の事が、好きです…………でも……」

「でも、まだ今は、付き合ひ事は出来ません。」

誰にも負けない位、松下の事を好きって言う自信が無いから……。  
だから、自信を持つて好きと言えるその日まで……待ってくれませんか？」

こうして、長い一日が終わった。

そして私達2人は、新たな一步を踏み出した。

## 第1-3話：一心受験生です from: you

早いもので、明日から夏休み。  
あの日から約1か月が経つた。

私達2人の間で、特に何があったといった訳ではない。  
でも、そんな毎日がすごく楽しかった。

唯一変わった事と言えば、南君が私の事を「結衣」と呼んでくれる  
ようになつた事。

今まで名字で呼んでいたけど、告白した次の日、「結衣」と呼ば  
れた。

あまりに突然だったのでビックリしたけど、凄く嬉しいかった。

好きな人から、名前で呼ばれるのってこんなに嬉しいんだ。

そんな呑気な事を考えていると、先生が背広をビチッと決めて教室  
のドアを開けた。

そして手には、何やら白い書類が…。

通信表……。

成績の事を考えたら、南君の事を考えてられないなった。

もしこれで悪かったら、南君と一緒に高校なんてとても無理だ……。

出席番号順に名前が呼ばれる。

この待つている間の緊張感が、たまらなく嫌だなあ……。

「松下結衣！」

恐る恐る、中を開けてみる。

333333333333……。

オール3。これって良いのか悪いのか…。

先生の言葉には、

「授業態度がどの教科も良じよつです。提出物も良く出ています。  
……ただ、テストの点数をもう少し良くしないと、志望校合格は厳  
しいです……」  
と書いてあつた。

頭の中に「ガーネン」と言葉が連打する。

……「んなんじや、南君と同じ高校に行けないよ…。  
夏休みになんとかして挽回しなきやなあ…。

するとえみがスキップしながらやつて來た。

「どうだつたあ？」

その口調やさつきのスキップから見て、えみはきっと成績が良かつたんだろう…。

こう見えて、えみは結構頭が良くて、クラスで上位3人ぐらいたは入っている。

私は通信表をえみに差し出す。

「志望校合格は厳しい……かあ。そんな事書かれちゃ落ち込むねえ…」

「まあ、テストの点が悪かった私が悪いんだけどね…」

そう言いつつ、思わず溜め息が漏れた。

もひとつテスト勉強ちゃんとすれば良かった…。

「でもさあ、他のは出来てるんだから、テストの点さえ良くすれば良いんでしょ？」

「まあそうだけどね…。でも、もう3年の後半だし…かなり頑張らないといけないよね…」

さうに落ち込む私に、えみが肩を叩きながら言った。

「大丈夫！私達の県は3年の成績全部が評価されるから、まだ望みはある！！

それにゃあ、夏休みに南君に勉強教えてもらえば良いじゃん…！」

「でも、大会もあるし忙しいんじゃないかな…」

「大会終わってからでも良いじゃん！あとは自分の力でどうにかするしかないねえ」

そう言って、ちょっと意地悪そつに笑うえみ。

そして、翔太君も南君を引き連れて私の所にやつてきた。

この2人もきっと成績良かつたんだろうな。

この中で、バカなのは私だけか…。

「ねえ南君ー夏休み中に結衣に勉強教えてあげて…！」

お願いーと書いて手を合わせるえみに、南君は案外すんなりと答えた。

「俺なんかで良かつたら、喜んで教えるよ」

嬉しさと驚きで、田が点になる私。

「ほら結衣も、教えてもううんだからちゃんどお願ひしなきや…！」

「あつ…はつ…い！」

あまりの驚きに声が少し裏返つてしまつた。

「えつと…バカな私だけど、一生懸命勉強するので、夏休みの間先

生よろしくお願ひします！

すると南君は、優しく笑つて「じゃあ、この夏休みで頑張りつべー！」

と言つてくれた。

「南先生よろしくね！」

声を揃えて言つう、えみと翔太君。

なんだか私以上にやる気満々だ。

なんか期待されちゃつてるけど……みんなの期待に答えられるよう  
に、そして南君と同じ高校に行く為、頑張らなくてわ！

中学最後の夏休み。

……恋に受験に部活ことにして夏になりそうです。

## 第1-3話：一心受験生です from: yuri (後書き)

雨音の独り言…

皆さここにちわ。お久しぶりに雨音です。

今回は中学生の本業、受験について書いてみました！

今までは、年齢を内緒にしていましたが、この機会に公開します！

ついー私は結衣や南君と同じ中学生です。

なのでこれからは、2人の恋はもちろん、受験や部活、中学校の行事 etc…。

現役中学生ならではの田線から書いて行こうかなと思っています

風邪が流行つてますが、体にはお互い気を付けましょう。

それでわ今日はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8532a/>

---

スカーレット

2010年10月12日08時15分発行